50 歳未満の大腸内視鏡検査について

　50 歳未満の大腸がんは見逃されやすく、進行するまで発見されないケースが多いことが、新たな調査から明らかになりました。若年者の大腸がんは痔核や過敏性腸症候群（IBS）と誤診されやすく、正しく診断されるまでに複数の医師の診察を要したケースが多く、詳細が米国がん学会（AACR 2019）で発表されました。

米国がん協会（ACS）の推計によると、米国では 1990 年代以降、55 歳未満の大腸がん罹患率は毎年 0.5～2%のペースで増えており、直腸がんも 1970 年代から増加がみられています。

若くても大腸がんと疑われる症状が長引く場合には、大腸内視鏡検査を受ける必要があります。また、患者は大腸がんの家族歴の有無についても知っておく必要があります。